広がりと深まり、そして編み込み

高く広がる太陽系　重なり深まるお話作り

熊本県　荒尾第一幼稚園

目次

研究の背景　本園の考える「科学する心」　…… P.1

本園のここ数年の取り組み　…… P.1

保育者の願いを込めた環境構成の必要性　…… P.2

「科学する心を育てる」保育の手立て　…… P.2

実践報告1　…… P.3

『100かいだてのいえ』を作ろう（4歳児クラス）2023年5月～7月

事例の考察(実践1)　…… P.7

実践報告2　…… P.9

お話作りをしよう!! (5歳児クラス)　5月下旬～6月中旬

事例の考察(実践2)　…… P.12

「七夕会人形劇映画製作」【特別なプロジェクト活動】…… P.13

総合考察

「大切な体験」の本質　…… P.14

科学する心を育てる環境構成　…… P.14

今後の課題　…… P.15

研究の背景

本園の考える「科学する心」

本園は生活廃材などを使った造形活動を盛んに行ってきた。子どもたちは空き箱等をテープで繋げて、自分の思う物を製作していた。しかしながらその造形活動の多くは1日で終わってしまい日をまたぐことがなく、友達との協同性を育む機会に欠けることが課題だった。十数年前から保育環境を見直し、具体的な子どもたちの姿として「数日間続く、協同的活動」が生まれやすい環境を目指した。

最初は行事等をきっかけとした特別なプロジェクト活動として取り組み始めた。保育室の配置等を活動に合わせて大きく変更し行った。内容は雛人形の七段飾りを本物と同じように協同製作することや、七夕会に向けて人形劇映画製作(P.13、P14参照)などである。数日間続く活動の中で、子どもたちは課題を解決するために工夫し粘り強く取り組み、友達と協力するなどの姿が見られた。この活動は子どもたちの育ちにとって「大切な体験」があると私たちは感じた。それを「科学する心」と捉えた。

本園が考える科学する心
「自分や自分たちの思いを実現しようとする態度」
「友達と協力し課題を解決しようとする態度」

「特別なプロジェクト活動」でよく見られたので、日常の生活の中でいつでも見られる姿にならないか、考えるようになった。具体的な子どもたちの姿として数日間続く遊びや協同的活動を目指した。展開があり、友達に広がり、またより良くしていくなど深まりのある活動の中で「科学する心」が育まれると私たちは考えるようになった。この活動を「広がりと深まり」と呼ぶようになった。

本園のここ数年の取り組み

本園は園児数40数名3クラスの小規模な幼稚園である。園庭は狭いが、遊びによって場所が区切られて有効に活用されている遊びの文化がある。泥・砂のケーキ屋さん遊びをする場所や年長組がドッジボールやケイドロを行う場所などである。

2018年に素材等を置く棚を増やし、作業用のスペースとしてダイニングテーブルを置いた。造形活動の環境を充実させたことで少しずつ数日間続く協同的活動が始まるようになった。造形活動の環境に限らず、様々な物や道具を保育室や園庭に置くようにした。雨樋、容器、漏斗、木切れ、コンテナ、石、光や影で遊ぶことができるライトテーブルやOHPなど。子どもたちはそれらの物と向き合い、自分の思ったことを実現しようとしたり、自分の感じた物事を見つけ出そうとする姿が日常的に見られるようになった。

2019年には園庭に隣接した場所に畑ができ、2022年には使わなくなった送迎車の車庫を半屋外空間の「工房」とした。大きな絵画スペースで大胆な絵画活動ができるようにした。ボンドを使った木工ができる場所、土粘土、ネジやボルトの金属、石、上皿秤などを置いた。保育室内には、空き箱、厚紙などの造形素材、道具、画材、光や色で遊ぶ環境を用意した。

保育者は常にデジカメ機能のあるデバイスを携帯しているので、子どもたちが物事と深く向き合っている場面の写真を日常的に撮影することができた。その写真を元に子どもの見方・考え方について考察していく園内研修を数年間続けた。

小規模の園ながらも物をできる限り充実させているので、子どもの学びの場面等を日常的に撮影できるのだが、偶然出会うことが多かった。または特別なプロジェクト活動の中では私たちが

捉えた「科学する心」の場面を撮影することが出来た。しかし日常的な保育の中で、子どもの興味関心をもとに保育者の願いを織り交ぜて環境構成したとしても、「広がりと深まり」の活動にならないこともたびたびあった。上手くいく環境とそうでない環境があるのはなぜか。難しさを感じていた。「広がりと深まり」の活動につながる環境構成を言葉にすること。それがここ1年の私たちの課題だった。それが「科学する心を育てる」と捉えた。

保育者の願いを込めた環境構成の必要性

小規模な本園には森はなく、揺れる木陰の神秘的な光もない。耳を澄まして聴こえるせせらぎもない。教会のステンドグラスの幻想的な光もない。しかしながらそういった審美性を育む環境は、保育者の環境構成で作ることができる。それは決して保育者が主導する保育ではない。その他にも協同性を育む環境、自立心を育む環境など、保育者の願いを環境に織り込むことができる。そこに子どもたちを出会わせ、長い時間没頭したり、遊びが発展したり友達と課題を解決する経験をしてほしいと願った。保育者が子どもたちの育ちに必要と考える体験を、子どもの興味関心をもとに環境構成し、「広がりと深まり」の中でそれらの経験をすることができると考えた。

「科学する心を育てる」保育の手立て

園内研修では幼稚園教育要領の「見方・考え方を生かし、幼児と共によりよい教育環境を創造～」の見方・考え方を理解するだけでなく、その向こうに無数に広がる「見方・考え方の生かし方」に着目するようになった。物や素材を配置するなら、子どもたちにどのように見えるのか、形や色を揃えた並べ方やより整然とした並べ方にするなど丁寧に考えるようにした。またどのように感じるのかを考えた。

子どもたちに言葉をかける時、どのような言葉掛けが子どもたちの想像を喚起するのか丁寧に考えた。今までも配慮していたことであり、一見するとほとんど従来と変わらないように見えるが、より子どもたちの見方・考え方を生かした保育に取り組んだ。

2023年度は、子どもたちの思いから環境を構成し、心を動かす環境を心がけた。その姿から再構成して「広がりと深まり」の活動を生み出し、「科学する心を育てる」保育の手立てを探ることにした。

実践報告1　『100かいだてのいえ』を作ろう（4歳児クラス）2023年5月～7月

はじめに

4歳児クラスでは、100階建ての家を作りたいという保育者の意図から、保育室に100階建ての家コーナーを設置した。その場に興味を持った子どもたちが集まった時に、「100かいだてのいえを作ってみない？」と提案し、絵本を読んだ。今回の取り組みでは画用紙の大きさも小さめに準備し、1つを完成させることで程よい手応えを感じることができるように意識した。4歳児クラス5月の子どもたちにとって丁度良い活動となった。遊びの時間での取り組みであったが、クラスの全員が関わり、家は天井まで続いた。

1 「100かいだてのいえを作ろう!!」　（5月24日）4歳児

取り組みをするにあたって、保育者は絵本『100かいだてのいえ』シリーズを子どもたちと読んだ。次に子どもたちが作ろうと思っている動物の家は、どういうものか考えを引き出す言葉をかけた。子どもたちの意欲を引き出す環境として包装紙や画用紙、ペン、色鉛筆を見やすく並べた。

動物の住む家を想像しながら次々と作っていった。家が完成すると保育者が保育室の壁に縦に並べて貼った。保育者の身長でも届かなくなると脚立を倉庫から持ってきて、保育者が乗り、子どもたちが見ている前で作品を貼っていった。

【場面の考察・子どもの思い・姿】

画用紙、ペンを見やすく並べたことで「使いたい」という気持ちが生まれたと考えられる。作品を高く貼っていくと自分たちの身長を越えていくところで喜び、保育室にある階段を越えていくことで喜び、高くなる過程を楽しんでいた。

右の立体がエレベーター

2 「エレベーターもあったほうがいいんじゃない？」（5月25日）4歳児

どんどん高くなる家を見て、「エレベーターもあったほうがいいんじゃない？」と保育者に提案する子が出てくる。保育者が「〇〇がエレベーターもあったほうがいいかもって思ってるみたい」と近くにいる子どもたちにも共有することで、興味を持った子が集まってきた。エレベーターは何を使って作るのかを考え、画用紙を立体にして作ることに決定。それを壁に貼ることで満足した。

【場面の考察・子どもの思い・姿】

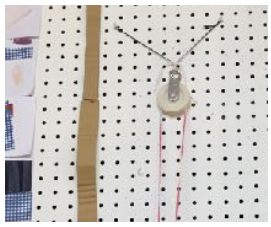
製作をしながらごっこ遊びのイメージが膨らんでいく。「この階に遊びに行きたい」という思いからエレベーターが作られた。保育者は空き箱を持ってくることを予想していたが、過去に画用紙などから立体を作った経験があり、そこで覚えたことを使ったと考えられる。

3 「このエレベーター動かないね」（5月26日）4歳児

最初は壁に貼るだけで満足していたが、エレベーターは動く方が楽しいと感じた様子。「このエレベーター動かないから動くようにしたい」と保育者に伝えにくる。そのことを部屋にいる子どもたちにも届くように保育者が代弁することで、「滑車みたいにしたらいい」というアイディアが出てくる。最初は毛糸で滑車の原理を再現

することにする。
【場面の考察 子どもの思い・姿】ごっこ遊びをするうちに上に登るようにしたい思いが生まれた。滑車のアイデアは、園内の半屋外空間の遊び場に遊具として置かれたばかりでその影響と考えられる。

4 「いいもの見つけた」（5月31日）4歳児
　動くエレベーターはとても楽しく遊んでいたが、引っ張るとエレベーターが下まで降りてこないことに困り始める。「先生がいないと(下ろすことが)できないもん」と話している。保育室にたくさん置いてある物で遊んでいたときに、「いいもの見つけた」と保育者のところへ車輪のようなものを持ってくる。「これよく回るね」と話していると、「これをあそこにくっつけたらもっといいかも」と提案する。



【場面の考察 子どもの思い・姿】
エレベーターは紐を引っ張って上に登らせることが楽しいが、毛糸は摩擦があり上がったままになってしまうことが問題だと感じている。ごっこ遊びを中断することなく保育者がいない時でも遊べるようにしたいという思いから、より良い方法を思いついた。

5 「上は空がいいかも」（6月上旬）4歳児
　エレベーターでの遊びが一段落すると、今度は高くなっていた家が気になり始める。絵本『そらの100かいだてのいえ』を見たこともあり、「ここは空に住む人たちの家だから周りは空があったほうがいい」と子どもたちが話す。天井に空を作ることにする。

　保育者の環境の再構成として、家を作れる環境は残したまま、空を描く環境を用意する。紙の大きさはあまり大きすぎると疲れてしまうのではないかと考え、B6サイズのものを選択する。4歳児(6月)の子どもたちがこだわって描くことができ、出来上がった満足感を得られる大きさを選んだ。
【場面の考察 子どもの思い・姿】
　完成した紙を天井にどんどん壁に貼っていくことで「もっと作りたい」という気持ちが湧いてきた。保育者の提案で始まった絵本の世界を再現する遊びだが、ここでは子どもたちの提案で空の製作が始まった。今回は面積が広がっていくことを楽しんでいた。自分が描いた空を探す楽しさもあった。

6 「太陽もあったほうがいいかも!!」(6月上旬)4歳児
　Rは晴れている空が増えてきたことで今度は太陽を連想し、「太陽を作ったほうがいいかも」と提案する。
何で作るのか、どのくらいの大きさで作るのか、何色で塗るのかは保育者と一緒に考え、準備する。
　段ボールに丸の大きさを描くことは保育者も手伝うことにした。赤と黄色の案が出て、「どうしようか？」と考え、「2つとも塗ったらいいと思う」ということになる。赤と黄色で塗ることにする。混ざる色を見て「オレンジになったね」と話す。
【場面の考察 子どもの思い・姿】

空には太陽があるという連想から出てきた。保育室にポスターカラーが置いてあり、それを使えば自分たちにもできそうと考えたのではないだろうか。筆で塗ることはそれだけで楽しかったようで、過程で赤と黄色が混ざることも感じていた。出来上がったものに対して満足感が大きかった。

7 「どんな月にする？」（6月上旬）4歳児

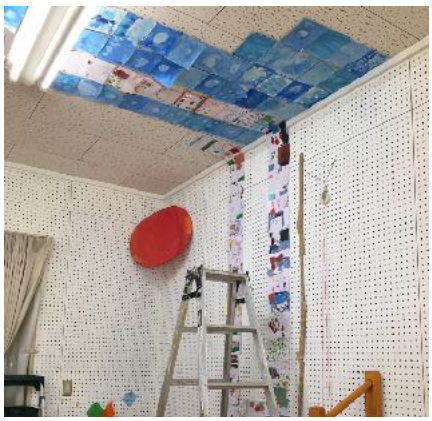
太陽が終わり、月の製作に取り掛かる。太陽同様、保育者と作りたい子どもたちで何色で塗ることにするか決める。ここではリアルさを追及するために灰色で塗りたいRと絵本などのイメージが強い黄色で塗りたいMで分かれる。両方の意見があることを知った上でどうするのかを保育者と一緒に考え始めると「じゃあ本物みたいでいいよ」とMが譲ってくれる。そこでこの日は終了。

翌日、先に登園したRは「月塗る」と話す。「今から塗るの？」と尋ねると「うん」と答える。友達を待つというよりも先に塗りたいという気持ちの方が強かった様子。お弁当の後、「裏を塗る」と言い、塗り始めるが「もしかしたらMちゃんも塗りたかったかも」と気にかけ「今から塗ること話してくる」と言いに行く。朝1人で塗ってしまったことを気にしているような言動。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

太陽からの連想で月製作。2度ほど製作に関する意見の違いを経験したことで、自分の思い通りにするのならば1人で塗ったほうがいいと考えたのではないだろうか。しかしその後の言動から数人でやることが楽しいと気づいたか。

8 宇宙を作ろう　　（6月上旬）4歳児



太陽、月と作った子どもたち。最初は朝になったら太陽が上がって夜になったら月が上がる仕組みを作ろうと話していたが、出来上がった作品を見て両方とも常に上に飾ってある状態にしたいと言う。

そのことを集まりの時間に話してみると「じゃあこっち（太陽とは少し離れた場所）に月つけようよ」「こっちが宇宙ってこと」「宇宙だったら他にも惑星ある」とイメージが膨らむ。空がある場所とは少し離れた場所に宇宙を作る計画が始まった。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

月を飾る場所が決まり、宇宙の場所が決まった。

9 宇宙への興味の広がり（6月上旬～中旬）4歳児

宇宙にある惑星の写真を子ども達の見やすい場所に掲示すると、「これは何星？」と興味津々。リアルに描いてあるものから違いが分かりやすく描いてあるイラストまで見て「これが作りたい」と自分の好きな色の惑星を選ぶ。

「いいね」と近くにいる友達が賛成してくれて一緒に塗り始める。惑星を作りたい思いの子と、ただみんなで色を塗る楽しさを味わっている子がいる。緩やかな協同製作が始まる。

【場面の考察 子どもの思い・姿】
　惑星は、色の準備が自分たちでしやすい単色のものから作られていったように推察される。

10 「惑星じゃない宇宙もいる」（6月上旬）4歳児

　宇宙の絵を描きたいと保育者に言いにくる。「いいね」と保育者が答えると「何色がいるっけ？これとこれがいる」と自分で絵の具置き場から必要な色を探して持ってくる。これまでは保育者と絵の具の色を何色にするか考える時間を作ってから塗るようにしていたが、この時から自分で準備をして塗るという姿が出てくる。
【場面の考察 子どもの思い・姿】
　星空は、過去に経験していた筆と筆をぶつけて絵の具をまぶす技法で塗ろうというイメージを持っていた。

11 いろんな惑星作りスタート（6月中旬～）4歳児

天井を見上げている

地球　6月下旬

　1つ完成すると次に作りたいものをみんなで選び作る、という流れで製作を進めていく。そこに関わってくる子はその日によって違う。惑星は友達を誘い合いながら塗ろうとする姿が出てくる。
　惑星の数も増えてきて、天井を見ながらみんなで寝転んでいた時に「わかったことがある」と気づいたことを話すA。「太陽はもーっと大きい」と話す。惑星の色には注目していたが今までは大きさはそこまで拘らず、「大きいのがいい」と話していたが、惑星の大きさにはいろんなものがあることに気づいた様子。太陽はどの惑星よりも一番大きいので、大きく作り直すことにしようと決める。
【場面の考察 子どもの思い・姿】
　惑星の製作は、保育者が準備していたことを、自分たちで出来る喜びを感じていたのではないか。自立心につながる充実感を感じていたと推察される。
　「太陽の大きさ」にある子が気づいたことで、イラストに描かれた太陽の大きさの意味にも気づいた様子。この時、保育者が間に入ることなく友達の言葉を聞いていた。

12 太陽の作り直し（7月上旬）4歳児

段ボールを切る

「ちがうかもしれないね」

　大きな段ボールを見て、自分たちで大きさを決めるところから始める。保育者が丸を描き、子どもたちが切る。「これなら本物の太陽みたいに大きい」と満足げな様子。太陽のイラストに斑点のような模様が付いていることにも気づき、それも再現しようと話す。
　斑点をつけてみると「なんかスイカみたい」と話し、ぼかすことにする。「上からちょんちょんする」という表現でこの場にいた子たちには伝わる。翌日、裏面を塗る時にいろんな子が関わっていたので、その塗り方を教えることにする。「こんな風にちょんちょん」と説明する。お弁当後、乾いている太陽を見て「なんかちょっと違うかもしれない」と言いにくる。

昨日のように綺麗に塗れていなかったことが気になった様子。「なんで？」と話している子どもたちに「ちゃんと塗り方教えてあげたのにね」と保育者が言うと「それがみんなあんまり分からなかったかも」と話す。違うと感じたことをみんなに話し、塗り直すことにする。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

より良くしたいという思いの子どもと、子どもたちだけで作業する楽しさや自立心を味わっている子どもが一緒になっていた。

思った物と違うものができた時、友達への配慮を感じる言葉が出ていた。

光る球状の物は保育室の照明。円形の着色された物が子どもたち製作の惑星

13 惑星で遊ぶ（7月上旬）4歳児

みんなが作った惑星を飾っているところにOHPをあててプラネタリウムのような空間を作り出す。その空間を見て「宇宙の音」と話しながら貝殻や鈴、保育室にある様々な素材を使って音を出すことを楽しむ。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

自分たちで作ったものをさらに綺麗にうつすことで、達成感や満足感も味わっていた。この日年長組が製作した映画をお遊戯室で鑑賞した。その影響ではないだろうか。

14.　太陽系完成　7月(下旬)4歳児

1学期終了後に夏祭りが行われる。その中で、保育室をこのままにして「100階だての家」や「宇宙」を、お家の方に見てもらうことを考えていると、保育者が告げると、「宇宙を全部作りたい」「みんなに完成させたところを見せたい」という気持ちが子どもたちから出てきた。残りの惑星の製作が始まった。

火星

冥王星

金星

【場面の考察 子どもの思い・姿】

夏祭りまでに全部完成させたいという目標を持つ。色の調合が難しい惑星の製作に取り掛かった。

事例の考察

この「100かいだて」の活動がはじまる前の保育室環境は、様々な素材や遊具が置かれた遊びの種類を多くした環境だった。4月当初でもあり、様々な物に触れて新しい保育室になれるというねらいがあったが、子どもたちはその場所に関わるも、遊びが続かず、深まっていかない様子を感じていた。場の数を減らし、一つの場所で行う作業を増やした方が良いと考えた。作品を掲示して「できた」という気持ちを味わせる必要性も感じた。その思いから環境を再構成し、「100かいだて」が始まった。

今回の活動は約2ヶ月に及ぶ活動で、子どもたちの見方や考え方をたくさん取り入れ、生かすことのできる保育になったと考える。また、子どもたちは自分たちがやりたいと話したこと、思っていることを次々に実現できることに、喜びや次への意欲を感じていた。困ったりどうしてかなと次へ進めない時には、保育者を通してクラス全体へ話すことによって新たなアイディアが生まれ、諦めずに物事へ取り組もうとする気持ちを持ち続けられていたと考える。保育者の関わりとして、子どもたちが「次はあれしたいな」と話していたこと、保育者自身がこうなっていくだろうなと予測したり願っていることを環境として用意しておくことで、途切れることなくどんどん展開されていく保育となった。また、自分たちのやってみたいという思いが強くなると保育者の言葉掛け、関わりも減ってきていることも分かった。

今回の取り組みの中では、『広がり』は家を繋げるところから空、惑星と広がっていく活動の幅のことを指し、『深まり』は最初は保育者と一緒に始めたことを自分たちだけでやってみようとする自立心、個人での製作から協同製作への変化や作品の深化、夏祭りまでに全部完成させたいという目標を設定し意欲を持って活動する姿への変化を指すのではないかと捉えた。しかし分けて考えるのではなく、この2つが相互に絡み合うことで次への意欲が湧き活動も広がる、自立心や子どもの育ち、深い学びに繋がる姿が現れるのではないだろうか。また、年少児の時から色々な物や素材と触れ合い様々な経験をしていたことも今回の取り組みを継続するために大きく影響していた。子どもたちは過去に経験したことを覚えており、その知識や技法を使って問題を解決している場面が何度もあった。それを経験の編み込みと私たちは表現する。過去の経験はその場の環境構成ですぐに作れるものではないが、保育者側の長い時間をかけた環境構成として重要であるといえる。

年少組時代の立体づくり
(パックのジュース)3歳児7月

夏祭り(7/22)当日。4歳児保育室で展示した太陽系とは別に、子どもたちが製作した宇宙や惑星を画像素材にして職員が製作したプロジェクションマッピング。夏祭りの最後に園舎に投影した。
左から　太陽　水星　金星　月　地球　火星　木星　土星　天王星　海王星　冥王星

実践報告2.　お話作りをしよう!!(5歳児クラス)　5月下旬～6月中旬

①〈素材との出会い〉（5月下旬）5歳児

保育室の奥に置かれてあまり活用されていなかった素材置き場を子どもの目につきやすいところへと移動し、どんな素材があるのか見たり、触ったりする時間を作る。ここには色々な材質の紙や、アルミ、半透明の板などを置き、子ども達が好きなものを選べるようにしている。また、その素材を使って描く時間も設けた。この時、子ども達に人気だったのはこれまで使うことの少なかったアルミや半透明の板だった。キラキラしているものや透明なものというところに魅力を感じていた。そして出来上がると、近くにライトが置いてあるのでそこで照らしてみたりして自分が塗った色が透けて白い紙に映る様子を楽しみ、「見て～映った」「わあ～キレイだね。虹みたい」など綺麗さや色が映る不思議さなどを感じていた。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

並んだ素材に興味関心を持つ。使ってみたいという気持ちから、描くことを楽しむ。

②〈描くものの選択〉

初め、アルミや半透明の板に絵を描くとき、子ども達は慣れ親しんでいるいつもの水性ペンを使っていた。しかし、そのペンでは弾いてしまったり、薄くて見えなかったりして「つかない」「だんだん見えなくなっていく」と話す。「本当だ。どんなものだったらつくかな？」と話していると、そこから選んだ素材によって、描くもの（油性ペン、クレヨン、鉛筆など）も変えていく姿が見られるようになった。（5月下旬）5歳児

【場面の考察 子どもの思い・姿】

画材や素材の特性に気づく。予測して確かめる姿が見られる。

③〈紙の材質から絵を描く〉（5月下旬）5歳児

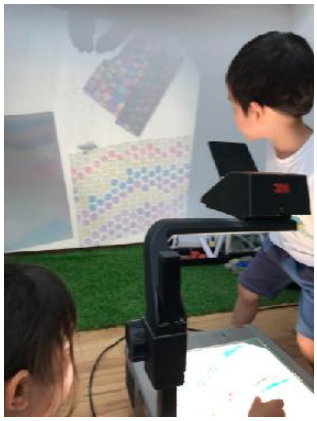
色々な紙や描くものに触れて十分に描くことを楽しむと、紙の種類を選んで絵を描くようになった。「この紙は黒いから夜みたい」「これは赤っぽいから夕方」とその紙から連想できるものを描くことを楽しんでいた。夕方、夜が出来上がると必然的に「じゃ、朝と昼も描こう」と描き進めていく。この頃から絵を描くときに、「この人は髪が長～くなってこんなになっちゃった」などと話をしながら描くことが増えて

きた。また、写し絵ができる紙を顔に当て友達の顔を描いて楽しむ姿もあった。そして素材の特性を使った意図した表現を始めた。簡単なストーリーが生まれた。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

保育者と以前行ったことを、友達と楽しむ。紙の特性を知り、その特性を生かして絵を描く楽しさを味わっていると考えられる。

④ 〈OHPで写してみよう〉　（5月下旬）5歳児



光に当てると白い紙に色が写った経験から、気泡緩衝材にも色を塗って光を当ててみる。しかし、ボヤッとした感じでうまく写らなかった。「光が弱いのかもね」と保育者が話すと「もっと強い光なら写るかも」と話す。保育者が他のクラスからOHPを借りてきてそこにのせてみた。するとキレイに壁に写り、色を塗っては乗せてを繰り返しながら遊ぶ。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

過去の経験から推測して試す。素材の特性と光(OHP)に利用できる組み合わせを知る。

透明なものは壁に映るということを子ども達は知った。

⑤ 〈重ねてみよう〉（6月上旬）5歳児

「これに描いても映るかな？」という保育者の投げかけに対して、Mが興味を持ち試してみる。Mが描いたものはキレイに写った。そしてその上に保育者が描いた絵を乗せると少しぼんやりと見えにくくなったことに気づく。「何か下の絵が見えなくなってきたね」と話していたので「どうすれば全部の絵が見えるようになるかな」と問いかける。すると「透明のやつだったら写るかも」ということで透明ビニールを持ってきて描いてみる。

【場面の考察 子どもの思い・姿】

予測して試す姿が続く。OHOに利用できる効果的な素材(ビニール)を知る。

⑥ 〈お話ができる!〉（6月上旬）5歳児

透明ビニールに描いて、絵を重ねていくと描いたものがはっきりと見え「見えたね!!」と喜んでいる。最初に花を描き、雨も描いて重ねていく。「お花が咲きました」「雨が降りました」とその状況を口にしながらOHPにビニールを乗せていく。その様子を見て保育者が「お話みたい」と話すと「じゃ、お話作ろうよ」とお話作りが始まった。そこから、どんどんとイメージが広がり「雨宿りしたってことは？」「雨が止んで虹が出てくるのは？」とお話作りに夢中になっていた。

1.　お花が咲きました。うさぎの親子がやってきました。

2.　雨が降ってきました。

3.　雨宿りをしました。

4.　虹が出てきました。

5.　みんなと一緒に旅行に行きました。

【場面の考察 子どもの思い・姿】
絵を重ねて映ることを試して確認する。絵が重なり場面が変わることで想像が喚起され自然とお話ができてくる。自分で言ったことが形にできる楽しさを感じる。イメージを言葉だけで伝え合いながら、次々に行動に移す。

⑦〈お話作り〉（6月上旬）5歳児
　これがクラスに広まり、色々な子がお話を作る。出来上がるとみんなに披露できる場を作るようにした。聞いている方もとても興味を持って聞く姿が見られる。作ったお話が収納できるファイルを用意し、いつでも作った話で遊べるようにする。友達が作った話はどんなものか分かるように作った話には題名と作った人の名前を記すようにしていた。保存できることで、作っただけで終わりではなく、繰り返し遊べたり、もっと話を膨らまそうと続きをする姿も見られた。
【場面の考察 子どもの思い・姿】
　友達に披露する時間を作ったことで興味を持つ子も出てきた。
作品シートを収納する場を作ったことで、管理をする自立心に繋がったのではないだろうか。数人で話し合い、「お話」を改良していく姿が見られる。

⑧〈色々なものを活用して作るお話〉（6月上旬）5歳児
　初めは透明ビニールだけでお話を作っていた。しかし作っていく中で「キレイに飾りたい」「音楽会の話だから音楽が流れたらいいんじゃない」などこだわりを持って作る姿が出てきた。OHPに乗せるビニールに梱包緩衝材に色を塗ったものや、ビー玉を乗せて飾りつけをした。

　音楽は5月頃お化け屋敷を作った時にお化け屋敷で流れてるBGMをiPadで作ったことを思い出し「iPadで作ればいいんじゃない」と考えて作っていく。また音楽会のイメージから「お客さんが来るまでは幕が閉まってるよ」など幕の開け閉めをどうするかなど試行錯誤しながら作る姿がある。音楽会の話は何度も改良されながら、より本物の音楽会に近づけられるようにと進められていた。またこの少し前から、台本を作って話を残すようにもなっていた。簡単なノートのようなものを作り置いておくと自分達で書いていく。

【場面の考察 子どもの思い・姿】
より良くしようという思いが友達との話し合いから生まれてくる。iPadでの音楽製作や会場作り等は過去に経験したことを使っている。子どもたちが台本を作ったことで、制作に関わっていない子どももお話に参加できる機会ができた。
　ノートの活用は、作った人が話を忘れないようにするという思いだったようだが、その本があったことで作った本人達だけでなく、他の子も楽しめる機会になっていたと推察される。

絵本はだれがどんなことをするのか知る

⑨〈七夕会の映画の脚本を作ろう〉（6月中旬）5歳児
　7月7日の七夕の日に年長組が映画を作ってみんなに披露するという行事があった。この映画作りは毎年、既存の七夕の絵本を題材に作っていた。映画作りが始まる前に保育者が「こんなことをするんだよ」と話すと、1人の子が「自分達で（お話を）作ったらいいんじゃない」と提案する。周りの友達も「いいね！」と前向きだったため、今回の映画作りは脚本から作ることに決定した。
　保育者は、映画の脚本となると作ることが難しいと考えていた。そこで絵本をよく知るところから始めることにする。夏から連想できるものを出し合い、次に夏の絵本を探しにいく。そして選んできた絵本は誰（何）がどんなことをする内容なのかということを出し合っていく。絵本ってこんな感じでできているんだということを子どもたちがイメージできるようになったところで、映画の脚本に取り掛かっていく。初めは子ども達も「どうしようかな」と悩むこともあったが、誰かが言ったことでイメージが膨らんできて、どんどん「こんな感じ？」「こうしたらいいんじゃない？」とアイディアが生まれてきた。子どものアイディアから保育者もアイディアがひらめき「面白いこと考えたんだけど」と言うと「なになに？」「いいね」「あっ、じゃそのあとはこうしたら？」といい感じに話の骨格が決まってきた。
　その骨格を元に保育者が話の内容を考えホワイトボードに記入した。子ども達がその話に合う絵を描いたので絵本を作り、映画作りがスタートした。出来上がった絵本を見たときは、満足した様子。

話の内容を描く

映画の原作絵本をプロジェクターで投写

【場面の考察 子どもの思い・姿】
　「話」を自分たちで作るアイデアは、これまでのお話作りのイメージがあったと思われる。話し合いによって想像が膨らみ「話」ができていった。
　劇の練習の時も自分達で作った話なので内容を理解していてスムーズに練習が進められた。

事例の考察
　今回の活動では、最初の素材との出会いを丁寧に進めた。色々な素材の中から自分で選んで描くことを楽しむ中で素材の特性に興味を持ったり、気づいたりしたことがお話作りに繋がったの

ではないだろうか。子ども達が実際に手を動かして描いたり遊んでみることで「このペンはこの紙には写らない」「透明なものだと描いたものが壁に写るんだ」ということに気づいた。
経験したことを活かして様々な体験へと発展したのだと考えられる。

また、より良い環境を創造するという点では、物の配置や並べ方も関係してくると感じた。今回は初めに素材をたくさん並べておいていた。また、部屋の中にはあらゆるものが置いてあり、子どもが「これをしたい」と思った時にすぐ使えるようになっている。「やりたい」と思った時に、材料や場があることですぐに取りかかることができ、子どもの興味関心や意欲が途切れることなく継続できた。

お話をより良くしていく過程で子ども同士の話し合いが始まった。過去に経験したことを元に話し合い、今現在の課題に織り込み、編み込んでいく。自分たちのプロジェクトをより良くしていくことで自立心を感じる活動になった。この活動が映画作りまで発展したことで、子ども達にとって満足感や達成感を味わえたいい経験になったと考える。

【参考として】　その後に行なった「七夕会人形劇映画製作」【特別なプロジェクト活動】

行事に向けて行う5歳児クラスの恒例の活動である。この活動は6月から7月にかけて２週間ほどで行われる。ペープサートや小道具・背景を子どもたちが製作し、劇を行なう。保育者が撮影し編集した動画に子どもたちが、園内から見つけた効果音をiPadで録音したり、BGMを音楽をアプリで製作して、映画を仕上げる。過去の取り組みでは既存の絵本を原作にして行なっていたが2023年度は「実践報告2」で作ったお話を原作とした。

1.「うごくもの」「うごかないもの」を見つけ出す話し合い。

2.背景画製作。星空は筆に絵の具をつけて、筆と筆を小刻みにぶつけて絵の具を細かく塗す技法。

3.　小道具製作。試行錯誤を経て数人の子どもが関わり、完成させた。

4.　練習

5.舞台裏

6.振り返り　演出 操作の検討

7.効果音探し

8.iPadに効果音録音

9.七夕会　映画上映

総合考察

「大切な体験」の本質

「広がりと深まり」は保育者が保育を見るときに使う比喩である。プロジェクト活動の進行に伴う子どもたちの変化を職員間で共通理解するのは役立った。しかし見る人によって異なったりすることもある。場面の考察をする時は「広がりと深まり」の分類から離れて、検討することにした。時系列順に振り返ると、活動の後半は、子どもたちだけで物事を進めていっていることに気がついた。

4歳児のダンボールの惑星づくりが次々と行われていた場面。ある子は太陽系をひとつずつ作ることを楽しんでいる。一緒に製作をしている子の中には、ダンボールに色を塗ることや、それを数人で行う共同作業を楽しんでいる姿もある。何度も作業を繰り返していくうちに、保育者の援助が要らなくなり、自分たちで準備をして進めてくようになった。また、夏祭りまでに惑星を全部完成させたいと目標を設定し、成し遂げたことで満足感や充実感を味わい自立心を感じる場面もあった。私たちが感じていた数日間続く活動の中で見られる「大切な体験」は、このことも含まれているのではないだろうか。

5歳児の「お話作り」の場合も、数人の子どもたちだけで物事を進めていくようになっているが、共同作業だけでなく話し合いが見られた。「お話」を良くしていくためのiPadの効果音録音、その内容について話し合い、BGMをiPadで作り、場面に合うかどうか話し合う。イメージを話し合いの中で共有して活動を進めていこうとする姿に、協同性や自立心の育ち、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を感じた。

科学する心を育てる環境構成

「広がりと深まり」を目指したプロジェクト活動を振り返ると、最初に「やってみたい」「使ってみたい」「面白そう」という興味関心を持つ心が動く環境が重要となる。そして、その時々に実現したいという思いが叶えられるアトリエのような作業場や、材料や素材・道具が揃っている環境が必要だと感じた。これらは物を用意することなので比較的わかりやすい環境構成だが、それでも物の配置の仕方、子どもにわかりやすい置き方、提示の仕方など十分に考える必要があった。4歳児の活動では、活動環境の場を減らして選択しやすくしたこと、ポスターカラーなどを並べて子どもたちに扱えるようにしたことは、展開していく重要な要素だった。

5歳児の活動では、素材を種類別に整理し画材も綺麗に並べた。見るだけで手に取って見たくなる環境を作ったことから始まった活動だと考えられる。

並べたペン類　5歳児保育室

計画の段階ではコントロール出来ないが、活動を広げたり深めたりすることに重要な目に見えない2つの環境があることに気づいた。1つは「ごっこ遊び」である。

4歳児の「100階建ての家」の最初の大きな展開は「エレベーター製作」と思われるが、これはその場を利用して行われていたごっこ遊びから生まれた。そして、ごっこ遊びをいつでもやりたいという思いから「「エレベーターの改良」という深まりが見られた。5歳児のお話作りでも想像で遊ぶ「ごっこ遊び」が活動を展開させるそのものだった。

2つ目は「過去の経験」である。物事が深まっていくときに過去に経験した方法・技法が使われることが度々あった。その問題に過去の経験が編み込まれることで強度が増すように良くなっていく。エレベータの立体製作、滑車、星空の描き方、iPadのBGM製作などである。

現在、本園では「本園のここ数年の取り組み」で記したように保育環境を見直してから、モノや技法、素材をたくさん配置するようにしている。数日間続く遊びにはならなくても、子どもたちが集中して物事と向き合う姿がある。時間の長さに関係なく、「集中」や「没頭」が大切なの

ではないだろうか。それらは「探究しようとする態度」である。その体験の積み重ねが今回の深まりや課題解決に編み込まれていったと考えられる。そのサイクルも「科学する心」にあたるのではないだろうかと改めて考えた。

今後の課題

今回のプロジェクト活動で得たことを活かして3歳児に、物を何かに見立てるため周りに線などを描いていく設定保育を行なった。子どもたちにとってどう見えるのか想像して、見立てることをねらいにした活動である。保育者は、どのように環境構成を行ったら子どもたちが集中し没頭する活動になるかを考えた。

3歳児 2023年8月

あえて加工や変形できない、子どもたちが何に使うのかわからないような工具などを多く選んだ。描き加える画材はシンプルな活動にするため黒いマジックだけにした。物を見やすくするために、床に広い紙を敷き、当初そこにきれいに並べることにした。しかし、たくさんの物を一度に見たら混乱するかもしれないと再考し、最初に一つずつ、お話仕立てで登場させ、保育者がやり方の見本を見せてから、物を並べることにした。

3歳児 2023年8月

子どもたちを集めた前で保育者がスプーンを登場させた。保育者は声を変えてスプーンを人形のごっこ遊びのように「いつも食べるときに使われるけど、たまには他のことをしたいな。変身病院のお医者さん、僕は他のものになりませんか?」と子どもたちに問いかけた。3歳児にはこの問いかけは難しかったようだが、なかには理解して「砂場で使うスコップに似てる」という子がいた。そして子どもたちの前で紙の上に乗せて、線を書き加えて「スコップ」に変身させた。子ども達は興味深く集中して見ていた。この作業何度か繰り返した後、用意していた物を広い紙の上に並べて、子どもたちに黒いマジックを渡した。子どもたちは没頭して黙々と自分の感じた物事を形にしはじめた。それは手探りで何かを見つける姿に見えた。この活動は、どうしたら子どもたちの心を動かせるのかを保育者が特に意識して徹底的に考えて行なった。

工房 筆をぶつける技法で遊ぶ

本園では多くの物を子どもたちの周りに配置している。この「物と子どもたちが出会う時」、「子どもたちにどう見えるのか、何を考えているのか」をより丁寧に捉える必要がある。

工房

園庭に面した半屋外空間は、保育室にはない様々な物が置いてあるが、日常保育のプロジェクト活動と連動して、計画的な物の配置をすることが今後の課題である。今回は、滑車や星を描く筆をぶつける技法が編み込まれる形で使われた。また意外な物が活動の幅を生み出すこともある。多様な体験が重要なのだと思う。今、行なっていることを丁寧に振り返り、重ねていくことで新しい道が見えてくる。

【研究代表者名・宇梶達也】
【執筆者名・上野汀紗　増永彩希　宇梶達也】